

ハイパーレスキューの装備を探れ!

ハイパーレスキューの隊員は、普段はオレンジ色の救助服を着ていますが、出動時は現場の状況に合わせて、服装や装備を変えることもあります。今回は特別に、ジュニア記者が4種類の装備を着てみました! 少しでも早く現場で救助活動ができるよう、ムダのない素早い行動が求められます。



星乃さんは、水難救助用のウェットスーツとフローティングベストを着着。素早く着替えられるように、さまざまな工夫が施されています

「準備よし!」着装始め!と声を出し、隊員の皆さんの丁寧なアドバイスを聞きながら着替えに挑戦。急げば急ぐほど、慣れない着替えに苦戦!



黄色の毒劇物防護衣は毒劇物などの有害物質から体を守るため、防護衣と長靴、手袋がすべてつながっています。慣れないと足を入れるだけでも一苦労



フル装備は総重量 20kg!



救助依頼から出動までの隊員の準備時間は、1分が目標とされています。防火衣を着るお手本を見せてくれた隊員は、なんと40秒で着替えが完了!

防火衣



大山 菜乃 さん

火災現場では防火服上下、防火手袋、防火靴、ヘルメットを着着。さらに、煙から身を守るために空気呼吸器を装着し、無線機や照明器具なども携帯します。

感染防止衣



高田 久乃 さん

救急車でケガ人や急病人を搬送する救急隊は、傷病者の血液やおう吐物などからの感染を防ぐため、防水性・ウイルスバリア性に優れた感染防止衣を着ています。

毒劇物防護衣



羽川 真奈 さん

毒ガスや薬品による化学災害の現場へ向かうときに着用する防護衣です。1995年に東京で発生した「地下鉄サリン事件」の現場でも、このような防護服が使用されました。

ウェットスーツ



星乃 權乃 さん

水難救助隊のウェットスーツは上下が一体になっており、保温効果もあります。また、着脱がしやすいよう、胸部分だけでなく手首と足首にもファスナーがついています。

防災意識を高めるために

防災意識を高めるためには、普段からの備えが大切です。お風呂の水をためておく、缶詰などの食糧を備蓄するなど、いつ起こるかわからない災害を想定して、1~2週間は自力で生活できるよう備えておくことが大切です。

また、定期的に「備蓄食糧を食べる日」を決めて備蓄品の入れ替えを行うと、賞味期限切れを防ぐことができますのでおすすめです。



東京消防庁 第六消防方面本部 消防救助機動部隊 消防司令補 鈴木 貴博 さん

地震、火災、水害など

さまざまな災害に備える



ハイパーレスキュー

東京消防庁第六消防方面本部消防救助機動部隊に足を踏み入れると、そこは災害救助のスペシャリストたちが集う場所。大型重機や、訓練で使用するがれきの山が視界に広がります。屈強な隊員の皆さんとともに、ジュニア記者たちの貴重な体験が始まります。

から学べ!



ハイパーレスキューとは?

1995年に発生した阪神・淡路大震災の教訓から、通常の消防隊では対応できない災害現場で迅速な対応をするための部隊として創設されました。多くの命をいち早く救うことを目的としたスペシャリスト部隊で、大型重機や最新の資機材を扱うための高い技術・能力を持つ隊員が集まっています。



敷地内には、救助車やポンプ車など、消火・救助活動に使われる車両がずらりと並んでいます。この日は、クレーン車を使った訓練が行われていました



救助訓練で使う4階建ての訓練塔やたくさん重機に加え、大きな岩などが雑然と置かれた「ガレ場」もあります。災害現場は足場が悪い場所も多いので、このような施設で日ごろから訓練を重ねています



ハイパーレスキューの救助活動訓練を体験!

普段から地域の防災のためにさまざまな活動を行っているジュニア記者たちが、本格的な救助活動訓練を体験しました。一つひとつの動きを素早く行うのはもちろん、周囲に声をかけながら安全面にも注意を払うことが大切です。

放水訓練

訓練用の建物を使った放水訓練です。建物の中に立つ、炎に見立てた旗を目掛けて放水します。隊員の皆さんも普段から行っている大切な訓練です。なお、消防士が使うホースは、学校などの建物に整備されている消火ホースより太く、水圧も強いのが特徴です。



準備が整ったら、離れた場所にいる隊員まで聞こえるよう「準備よし、放水始め!」と大きな声で合図を出します。ホースの先は右脇下と右腕で抱えるように持ちます



左足を1歩前へ踏み出し、膝を少し曲げてしっかりと地面に着けた状態が基本姿勢です。放水の反動をおさえるため、右足は後ろにまっすぐに伸ばして基本姿勢を保ちます



建物の全体を見渡して、火が残っていないかをよく確認。放水を止めるときは「放水止め!」と声を出して、隊員に伝えます



放水の反動が大きく、一人では転倒の危険があるので、隊員の皆さんがジュニア記者の後ろでホースを持ち、補助してくれました



1日体験入隊どうだった?

「防火衣を着たときは、倒れてしまうのではないかと思ったほど重くて驚きました。この装備で救助活動をしているレスキュー隊の皆さんへの尊敬の気持ちが、より大きくなりました(大山さん)」「緊張したけど、訓練が無事に終わって安心しました。あれほどの圧力の放水をするだけでも大変なのに、それを火災現場でできるのは本当にすごいことだと思いました(高田さん)」「放水訓練など貴重な体験ができたし、もしケガや病気で動けなくなった人を見つけたときにどうすればいいかを教えてもらえたことが印象に残りました。今後の生活に役立てたいと思います(羽川さん)」「人命を助けるという責任重大な仕事をしている皆さんは、改めてカッコいいと思いました。人を助けるときの最適な方法を学べてよかったです(星乃さん)」



搬送訓練

傷病者は、救急車が到着するまでできるだけ動かさないのが原則ですが、危険な場所にいる場合は移動させる必要があります。ジュニア記者たちは、現場に担架がない場合の搬送方法を指導してもらいました。



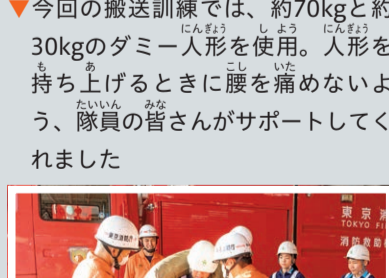
二人で搬送をする場合、頭部側の救助者は傷病者の脇の下から手を差し入れて手首付近を持ちます。足部側の救助者は足を交差させて両手で抱え、同時に持ち上げます



一人での搬送をするときは、傷病者の頭部側から両脇の下に手を差し入れて上半身を起こし、持ち上げながら移動します



火災現場で消防士が行う「ファイヤーマンズキャリア」と呼ばれる搬送法。傷病者を抱えた状態で片手が空くため、障害物をかき分けて進むことができます



今回の搬送訓練では、約70kgと約30kgのダミー人形を使用。人形を持ち上げるときに腰を痛めないよう、隊員の皆さんがサポートしてくれました

南千住第二中学校レスキュー部 創部10周年



南千住第二中学校のレスキュー部は、今年で創部10周年を迎えました。地域の方とのつながりを大切にしながら、防災の取り組みに努めてきたレスキュー部。今後の活動も期待!